

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 常葉大学大学院 学校教育研究科
	事業名： NITS・常葉大学教職大学院コラボ研修プログラム
	研修等名：【NITS・常葉大学教職大学院コラボ研修】 教師自身の「主体的で対話的な学びの場」となるコラボ研修 「地域史に息づく静岡県の山城」～フィールドワークから探る“知られざる歴史”～
	開催日時：令和6年10月21日 14時～16時30分 開催場所：常葉大学（静岡県静岡市駿河区弥生町6番1号） 参加人数（総数）と参加者の属性：（36人）一般教員6人、行政職員1人、一般市民3人 大学院生19人、学部生1人、大学教員6人

目的：

- 1 教師自身の「主体的で対話的な学びの場」となる研修を目指す。
「教師自身の『主体的で対話的な学びの場』となるコラボ研修」をテーマとし、これまで行ってきたコラボ研修を再構築する形で実施する。グループワークを活動の主軸とし、参加者を主語とした研修を目指す。
- 2 静岡県の山城や地域史について学ぶ中で、参加者が自己の在り方を考えることができるようにする。
静岡古城研究会会長の望月保宏氏を講師として招き、静岡県の山城や地域史に関する新たな知見を提供してもらう中で、望月氏の社会科教員としての生き様や研究者としての姿勢等について学ぶ機会とする。半世紀近くも一つのことを追究し続ける望月氏の姿は、参加者にとって、自己の在り方を振り返る機会を与えてくれるものとする。

内容：

- 1 グループの顔合わせ
開会行事終了後、研修への参加目的別に分かれた5～6人のグループで、研修目的や研修に期待すること等を交えながら互いに自己紹介を行った。
- 2 講師の講話
「地域史に息づく静岡県の山城」～フィールドワークから探る“知られざる歴史”～というテーマで、静岡古城研究会会長の望月保宏氏の講話を聞いた。石垣の上に造られた天守閣のある城とは違い、戦の砦としての中世の山城は、築かれた場所もその造りも、全く趣を異にするものであること等を学んだ。
- 3 グループ協議
研修への参加目的に基づき、講演内容や今後に生かせそうなこと等について、グループごと話し合った。講師も適宜、グループ協議に加わり、助言等を行った。
- 4 グループ発表
グループで話し合ったことを発表した。「今回の知見を、子供の探求的な学びの材料として活用していきたい」、「教員として現地に足を運んで下調べをすることの大切さを学んだ」、「社会科の授業では、子供たちに自分たちの地域と結び付けて考えさせることが重要だと分かった」、「自分の知らない世界のことを学べたので、今後の人生に生かしていきたい」といった意見が出された。
- 5 講師の講評
発表を受け、講師に講評をしてもらった。「山城の跡は、戦争遺跡であることを忘れないでほしい」、「地域を学ぶ材料として山城を生かしていってほしい」といった言葉があった。その後、閉会行事を行い、研修を閉じた。

成果：

- 1 参加者が静岡県の山城や地域史に関する新たな知見を得ることができた。
（参加者の声）・教員として静岡県内の山城や歴史についての知見を広げることができた。
・郷土の歴史について、城をキーワードとして深く学ぶことができた。
- 2 参加者の主体的な学びをサポートすることができた。
（参加者の声）・改めて地域の歴史を学びたいと思えた。
・多くの見方・視点から山城について学校現場で生かせそうなこと、教師として生かせそうなことを考えることができた。
- 3 参加者にとって自分自身の在り方を考える機会となった。
（参加者の声）・教員としてのキャリアだけでなく、人生のキャリアについても考えることができた。

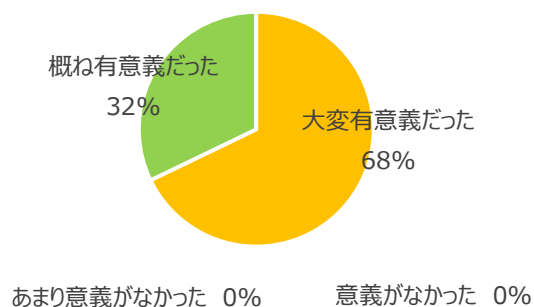
「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

1 参加者が新たに得た知見に基づいてグループワークを行うことの有用性

参加者を主語とした研修にすべく、今回は、グループワークを活動の主軸として研修を組織した。研修終了後に実施したアンケートで、「グループワークは有意義でしたか？」と尋ねたところ、「大変有意義だった」、「概ね有意義だった」と答えた参加者が 100%を占め、「あまり意義がなかった」、「意義がなかった」と答えた者は 1 人もいなかった。

グループワークの有用性を確認できるデータではあるが、単にグループワークがよかったということではなく、静岡県や地域史といった今まで知らなかった知見に基づいてグループ協議を行ったからこそ、参加者の活発な話し合いが促進され、有意義な時間になったのだと思われる。

【グループワークは有意義でしたか？】

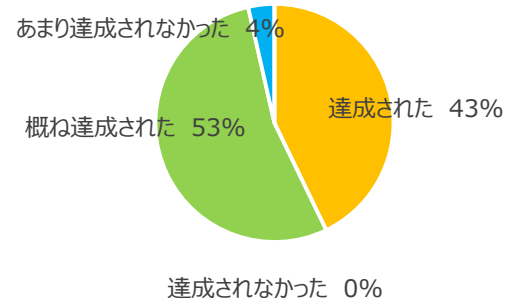


2 参加者の研修への参加目的を聴取し、それが達成できたか確認することの意義

事前に参加者から研修への参加目的を聴取し、事後のアンケートでは、その目的が達成できたか振り返ってもらった。結果は、「達成された」、「概ね達成された」を合わせた数値が 96%で、「あまり達成されなかった」という回答は 4%であった。決して低い数値ではないが、他の質問結果と比べるとややネガティブなものとなった。

ただ、自らの研修目的を達成すること自体、ハードルが高いものだと考えられる。よって、アンケート結果を否定的に捉えるのではなく、「NITS からの提案（第一次）」との関連から、研修への参加目的を事前に聴取し、それが達成できたかどうか確認したことに意義を見出したい。そして、次の研修会ではもっとよい結果が得られるよう努めていきたい。

【研修への参加目的は達成されましたか？】



アイデアや工夫したこと：

1 研修への参加目的を事前に聴取し、研修実施後はその目的に応じて振り返りをしてもらったこと

本研修に参加する参加者の意識を高めるとともに、主催者として参加者のニーズを確認するため、事前に一人一人から研修への参加目的を聴取した。また、その状況を研修実施前に講師にも伝え、講話に生かしてもらえようにした。参加者の研修への参加目的は下記の通りである（大学教員分は含まず）。

- (1) 山城と地域史について知りたい。（11 人）
- (2) フィールドワーク型の研究について学びたい。（1 人）
- (3) 社会科の授業づくりに生かしたい。（4 人）
- (4) 教員（又は研究者）としてキャリアアップを図りたい。（14 人）

また、研修実施後は、参加目的が達成できたかどうかについて、参加者に振り返りをしてもらった。

2 参加目的別に分けたグループによるグループワークを活動の主軸とした。

グループワークを活動の主軸にし、講話もグループワークの中に組み入れる形にした。それにより、グループとしての親密度が高まり、講話後のグループ協議にもスムーズに入っていくことができた。また、同じ参加目的の者でグループを組んだことにより、グループ協議でもつこんだ話し合いをすることができた。加えて、グループでの話し合いを確認しながら記録するツールとして、円形ホワイトボード（えんたくん）を用いた。これは、グループ発表の際に、全体への提示資料としても活用できた。



講話の様子



グループ協議の様子



グループ発表の様子